

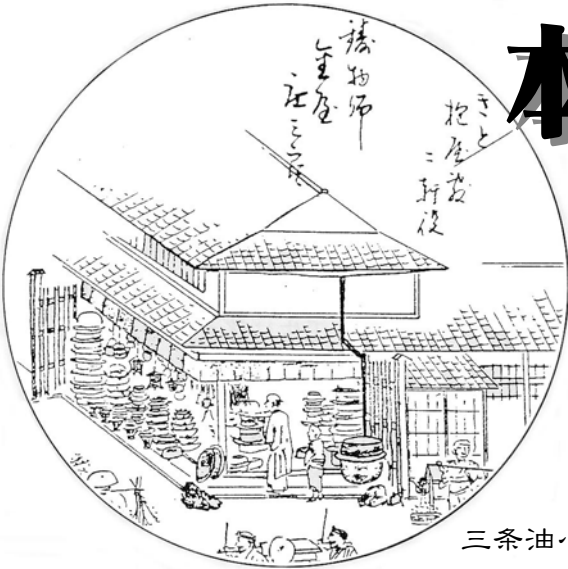
本能まちづくりニュース

第33号 平成18年6月25日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

E-mail: post@honnoh.net
URL http://www.honnoh.net

本能まちづくりニュースのカラー版は、ホームページでご覧ください。



三条油小路町絵図より鑄物師釜屋庄三郎方

「染のまち 本能 ～継ぐ技と心～」展示中

5月16日より、三条高倉の京都文化博物館において、本能ものづくり展示「染のまち本能～継ぐ技と心～」が始まりました。2階常設歴史展示室「匠の世界」の一角です。中央に染関連の作品や道具類の展示ケース、壁面には工程ごとの職人さんの作業写真と解説シート、両側に本能の歴史や現在のまちづくり活動紹介パネルが配置されています。5月27日に、本能まちづくり委員会西嶋直和委員長、6月10日に、金彩の松本勝氏・荒木泰博氏のギャリートーク(解説)が行われました。会期は9月17日(日)まで。その間、約1ヶ月ごとに、展示ケースの内容が、金彩・刺繍・家紋・型友禅を主としたものに入れ替えられます。各職人さんの解説も1回ずつ行われます。刺繍:7月8日(土)、家紋:8月12日(土)、型友禅:未定。いずれも午後1時半から30分くらいの予定です。本能のまちの雰囲気をかもし出すスペースです。地域の皆様、ぜひ見学なさってください。なお、常



本能のまちの雰囲気をかもし出すスペース(京都文化博物館)

設展は、特別展(特別展入場料金が必要)見学の場合は続きに見られますが、常設展(常設展示入場料金が必要)のみご希望のときは、3階入口よりご入室下さい。

まちなかの博物館の新しい活動への一歩として

京都文化博物館 学芸課 主任学芸員 南 博史

本能まちづくり委員会の方々のご協力をいただきました京都文化博物館歴史常設展示室の集中展示「匠の世界」のコーナーでは、開館以来18年にわたって、京のまちが生み、育て、継いできた多くの匠について、現在もその技を生業にされておられます様々な方々の協力を得ながら展示してまいりました。

今回の展示のテーマは、本能のまちを特徴づけてきた「京染めの技と歴史」を紹介するだけではなく、まちを守り続けてこられた町衆の心を象徴する「まちづくり」と「まちなか産業の活性化」という取り組みが、「京のまちなか」の今、そして未来へつながっていくという視点を含めることができました。京都文化博物館にとってこうした試みは初めてのことであり、まちなかの博物館として地域の方々と一体となって行なう活動として必ず今後につながるものと信じています。

ご縁があったとはいえ「京のまちなか」について全く素人の私に、丁寧にいろいろとお教えいただき本当にありがとうございました。ご協力いただきました本能の皆様にご心よりお礼申し上げますとともに、まちを守り育ててこられた皆様の“心粋(こころいき)”にあらためて敬意を表す次第です。



西嶋委員長による
ギャリートーク

京町家に住み続けて 林邸

今回は橋東詰町の林龍昇堂さんをお訪ねしました。あつかましくも上がり込んで、お宅を拝見させて頂き、本当にありがとうございました。昔のままに通り庭を使っておられ、火袋の化粧小屋組「準棟纂幕(じゅんとうさんぺき)」が威容を誇っていましたし、井戸も健在でした。レポートは那須裕子さんにお願いしています。(〇i)



威容を誇る準棟纂幕

「林龍昇堂」は、創業が天保5(1834)年という由緒のあるお香の製造・販売の老舗で、建物は店舗・作業場と住居を兼用された町家です。現在は6代目の林慶治郎さんと奥様の好恵さんがお住まいになられ、お二人から町家のこと、お香のことなどのお話を伺いました。

創業当時は、同じ町内で現在よりも少し東の方にお店があったそうで、大正2(1913)年、今の場所に建てられました。三条通りに面した1階は店の間(店舗)、続いて内玄関・応接室、そして通り庭・台所や奥の間といった日常生活の場。通り庭の上の火袋には、立派な太い梁がいくつも通っていて、天窓から射し込む光を浴びるその姿は、まるで壮大なオブジェ、まさに芸術作品です。何と



今でも残る防空壕

「防空壕」も当時のまま現存、台所の板間が出入り口となっていて、床板を上げると階段が地下へ伸びています。

2階は本床のある座敷になっていて、昔はお客様の接待の場とな

っていたそうです。林さんのお宅には階段が全部で7つもあり、その中でもとても急な箱階段や螺旋(らせん)階段はかなり珍しいものとお見受けしました。

そもそも林邸は店の間の建物と居宅は別棟になっていました。それを内玄関でつなぎ、その内玄関を挟んで、前に通り庭の坪庭、後ろに前栽(せんざい)の坪庭があったのですが、内玄関の雨漏りがひどかったので、昭和40年頃、前栽の坪庭を応接室に改築し、この部分を3階建てに増設されました。そして阪神大震災後の平成7年には土蔵を潰して離れを建てられましたが、「後から考えると土蔵は残しておけばよかった」と林さん。今は土蔵の鬼瓦を庭に置かれ、往時を偲ばれています。また庭には立派な手水鉢(ちょうずばち)

もありました。生業のお香に関して、以前は仏事関係の商いがほとんどでしたが、昨今のアロマテラピーブームで、香りに関心をもつ人が増えたことは業界としても明るい話題のようです。においの好みは、本当に人それぞれ違うそうです。沈香や白檀、丁子、乳香といったお香の原材料は、中国やベトナム、インドなどから輸入、敷地内の作業場で製品化されています。林さんは天然素材にこだわり(一部には香料を使用した製品も製造・販売されていますが)、「本ものの香りというものを知っていただきたい」とのことです。

林さんは修学旅行生の訪問も積極的に受け入れられています。「中高生の皆さんはきちんと下調べをして来られ、こちらの説明をよく聞いて、体験も楽しんでくれています」と課外学習としての修学旅行を高く評価しておられます。若いうちからお香に興味をもってもらえたら嬉しいことでしょう。におい・香りはイメージしていても言葉で表すとなるとなかなかむずかしいものですが、心のどこかに残り、ふとした時に思い出されるものです。

林さんご夫妻のお話から、町家に対してもお香に対しても「自然体」であることが人間に対しても優しいのだと思いました。これこそまさに「文化的財産」であり、深い精神性を感じながら、お香のかおり漂う橋東詰町を後にしました。(ゆ)



本能まちづくりとソーシャル・キャピタルとの関連性

前号に引き続き、3月21日の「本ものに出会える日」の公開工房ガイドツアーをきっかけに、本能まちづくり活動に参加された奥村直己君のお考えをご紹介します。

<伝統産業教育とリソース・マッピング>

Q. 公開工房ツアーにはどんな方が参加されていましたか？

A. 本能の公開工房ツアーは京都市「伝統産業の日」事業の中で、非常に参加者数が多く人気のあるものだと思います。参加者には、娘さんに「参加してよかった」と勧められてやってきた御両親、染織に興味をお持ちの方、市民新聞や「伝統産業の日」のパンフレットで知られた方などがおりましたが、やはりロコミで知ってやってこられた方が多いようです。「おもしろい」という噂はすぐに広まるものなのでしょう。

Q. ご自身は初めてガイドとして工房を見学されていかがでしたか？

A. 私は小さい頃本能で育ち、今回の6軒の工房巡りで途中に歩いた路地や通りは、知っている道ばかりです。しかし初めて付き添わせていただいて、驚きの連続でした。小さい頃からよく前を通っていた場所で、こんなお仕事をされていたのかと発見することばかりでした。まるで新しい場所に来たような感じで、私は何も「本能」のことを知らなかったのだと思いました。

Q. 公開工房ツアーは、本能のものづくりの雰囲気、地元で息づく伝統技術などを知ってもらいたいと思って始めたことですが、その意味合いについてはいかがお考えですか？

A. 公開工房ツアーは、伝統産業教育という視点でみた場合、かなり質の高い研修であると思います。工房の職人さんの仕事と技術を見学することだけでなく、その職人さんがどのような環境で仕事をされているかも見せていただけることができます。農業と同じように、染織というなりわいは、仕事と生活が一体化していて、切っても切り離せませんから。これからの日本を作っていく若い人々に染織業を理解してもらうには、十二分に価値のある伝統産業教育だと思います。そのことを知った若い人々の中から、しっかりとした意志をもって染織業の仕事をしてみたいという後継者も生まれてくると思います。

Q. 後継者が生まれることは、私達の最大の願いですね。他には？

A. このツアーは、まちづくりという視点でみた場合に、本能の人々が自分たちが住んでいる地域にはどんなことをしている人々がいるかを知る良い機会になっています。たとえば、発展途上国の農村の地域開発では、まずリソース・マッピング(Resource Mapping)というものが住民たちによって行われます。これは住民たちが自分たちの地域にどんなリソース(資源)があるかを調べることです。資源には、人が持っている技術もあれば、お金や資材や食料などのモノも含まれます。様々な資源が地域にあるにも関わらず、知っている人もいれば知らない人もいるというように資源の認識の共有ができていないことが多くあり

ます。その地域にある資源を認識し、そしてそれをうまくみんなを活用することによって地域全体が発展する可能性が生まれてくるのです。

本能について言えば、「染のまち本能」ということで、染に関する事業から行われ始めましたが、本能には染織に従事する方だけでなく、様々な方が住んでおられます。染織に関する活動で実績を積んで、将来、他の分野の活動も始めることができれば素晴らしいことだと思います。

<本能学区とソーシャル・キャピタル>

Q. 「おいでやす染のまち本能」イベントを手伝わられていかがでしたか？

A. 今回参加して、素晴らしいと思ったことは、酒屋の岡山さんや金物卸の木村さん達のように、染織と違った分野の仕事をしている本能学区の多くの方々が、会場設営・準備・接待、工房ツアーのガイドなどのためにボランティアで参加をされていることです。これは地域の「人々の繋がり」があるからこそなせるわざです。私が小さい頃から陸上や剣道クラブ、綱引きチームの活動は盛んに行われ、また区民運動会も現在まで活発に続けられています。本能の人々の絆がこれらの地域活動で育まれてきたのですが、今までのこれらの活動は地域の子供や人々に対してのいわば本能の人々が学区の内に対して行ってきた活動です。

Q. そうですね。地域の人の繋がり大切さ、絆ができていくことのありがたみは、いつも感じることです。まちづくりについては？

A. 今現在の本能まちづくりの活動は「外」の人々に向けて発信する活動にもなっています。小学校の統廃合もあって、今までと違った学区とも関わることになり、より自分たちの地域を意識しながら発信を行っていかねなければならないのかもしれませんが、今までの地域活動の流れから一歩発展した段階に到達しているのではないかと思います。先ほど言った「人々の繋がり」はソーシャル・キャピタル(Social Capital)に他ならないと思います。

Q. ソーシャル・キャピタルとは？

A. ソーシャル・キャピタルとは地域の人々の信頼(trust)や行動様式・規範(norm)、ネットワーク(network)を指します。ソーシャル・キャピタルが多い地域は人々が生き生きとして充足感に満ちています。物は使うとなくなるのが普通ですが、ソーシャル・キャピタルは使われないと消えてなくなってしまう。本能のソーシャル・キャピタルはまさに連綿と行われてきた地域の活動によって育まれ維持されてきています。また、ソーシャル・キャピタルの考え方に、内なる絆的ソーシャル・キャピタル(Bonding Social Capital)[結合型]とそれを超えてより開かれたソーシャル・キャピタル(Bridging Social Capital)[橋渡し型]があります

Q. なるほど。ご近所付き合いなど、日常生活での人間関係を煩わしく思う向きもありますが、「人々の繋がり」が

「社会的な資産」であることに気付き、蓄積するべきなのですね？本能のまちづくり活動では、それをどのように育てていけばいいのでしょうか？

A. 人々の繋がりの中で、「出る杭は打たれる」というように、良いことを言っているのに押さえ込まれて、新しい活動の芽がつぶされてしまったり、人の足を引っ張る、あるいは結束力が強いと排他的になる、等のことがあります。このようなソーシャル・キャピタルはネガティブ・ソーシャル・キャピタルと呼ばれています。地域で凝り固まってしまうことなく、よりオープンな人間関係づくりをしていけばよいと思います。

現在はまちづくり委員会に、本能学区に最近転入された住民や、市内の大学生・京都市の方々など、新しい人々がやってきてくれています。これは開かれたまちづくりを行うのに不可欠なことです。

奥村直己君には、本能まちづくり活動を大変よくご理解いただき、それをわかりやすい言葉で分析・表現していただけたので、ありがたいでした。実践は理想のモデルのように順調に進展しないものですが、整理してもらったポイントに留意して、「住みたいまち 育てたいまち 働きたいまち 本能」をめざして、皆で頑張っていきたいと思います。将来に向けての本能まちづくりには、新しい人材・若い仲間が必要です。どうぞお力添えをお願いします。奥村直己著「公開工房ツアーの意義とソーシャル・キャピタルとの関連性について」全文と参考文献は、本能まちづくり委員会ホームページに掲載しています。(N村)

『時代によって移り変わる信長像』 ～第一回本能ものしり講座～

去る6月2日(金)夜、本能自治会館において第一回目の「本能ものしり講座」が開催された。今回は、建勲神社松原宏宮司による上記のテーマの講演。学区民を中心に70名以上の参加で会議室は満員だった。

船岡山の東面に位置する建勲神社は明治に建てられ、織田信長を祀り、本能学区とも大変ゆかりが深い。大正期本能小学校の児童は6月2日に建勲神社へ遠足で御参りに行ったそうで、今もご縁が続いている。ちなみに6月2日は本能寺の変の日、織田信長の命日である。

松原氏は、信長以後の時代を8つに分け、各時代で信長がどう評価されてきたかを紐解いて行かれた。①戦国期には「他を寄せ付けぬ風圧」と同時代の武将から評された②江戸時代には東照大権現(徳川家康)を奉るため「残虐非道の人物」として語られた③開国後天皇中心に国内をまとめる方針の明治初期には「尊王の人」④明治後期は日本の海外進出に伴い「海外進出の人」⑤昭和初期は「軍水面」がピックアップされ⑥終戦後は翻って「文化人信長」⑦米ソ冷戦終結時代には「グローバルな経済政策」が、そして⑧現在では「宗教と政治面」がキーポイントとなることであった。また信長の様々なエピソードも紹介された。例えば、建勲神社所蔵・重要文化財の刀「義元(よしもと)左(さ)文字(もじ)」。この刀に

は永禄三年五月に桶狭間の戦いで信長自身が今川義元を討ち捕らえて得たとの銘が刻まれており、若々しい信長(当時27歳)の気持ちの高揚が読みとれるという。また安土城を農民・町人・他国人に木戸銭を取って見物させた。「安土桃山城の提灯イルミネーション」の話。安土桃山城から町中まで提灯を吊るし、鐘の合図で一斉に灯火して、その風景を楽しんだそうである。当時誰がこんな企画を考え付くことができたであろう。驚きである。

時代によって多様な評価がなされることはそれだけ信長公の人物の深さを示し、今なお衰えることのない信長人気はそんなところにあるのだろう。今回の講演で、時代の先端をゆく信長像を知り、改めて本能学区にも興味を持つきっかけができたと思う。(あ)



予告!! 本能夏まつり

**平成18年8月19日 夕方から
本能グラウンドにて**

詳しくはポスター・回覧などをご覧ください

ひとりごと ◎京都文化博物館の常設展「匠の世界」。特別許可をもらっての写真撮影ですが、難しいでした。(N村)

◎職人のわざが息(生き)づく京町家(〇i)

◎蒸し暑い夏を乗りきるクールな環境作りが話題となっています。町家にそのヒントがありそうです。(ゆ)

◎「本能ものしり講座」講演内容はとても興味深く、ここに全容を記載できなくて残念! 次回の講座も楽しみです。(あ)

◎祇園祭の遷幸祭では、午後7時ころから三条通を三基の神輿が通ります。今年、三油町を中心に塩屋町、橋東詰町で「おみこしを見る会」ができました。コンチキチンもいいけれど涼みがてらの神輿見物・・・おつなもの。MO